

舞曲 ● 高鸞石

日輪は水面にもだえ片翅の女王蟻よ詩を読むなかれ

硝子器に飴あまたあり甜瓜味の一粒を盗る君来ると聞き

スラヴ舞曲蓄音機より流しつつ鼈甲の櫛拭きにけり夜

頬あてて髪のうちねりは夜の田のめだかのごとく冷たくもあり

水盤にごきぶり墜ちて夏座敷父に宿りし墮落をおもふ

ながきながき撞球あそびわれが突く赤き惑星闇を移動し

果樹園に一本の髪落つるときわれを見下ろす二羽のはやぶさ

Mishina への憧れゆゑに脱ぎたがる青年のため苺は光り

眼球ほどの氷とけゆく地下酒場バにもはや怒りをもたぬわれらよ

笑ひつつ平成語る者たちの眼鏡を濡らし初雪はふる

氷のごとき麻雀牌をかきまぜて誰が最初に家を失ふ

始祖鳥の記事は暖炉の中に燃え朱あけのほむらのチエスのはじまり

螺旋階段うねに萼うたかのみどりいきいきと母歩み来るめまいの母が

花束に薔薇はかがやきわれにある指の血潮よとどまるな今

放送局うすべにいろに発光し処女おとめらにあり樹脂の翼は